△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

鹿角手をつなぐ親の会　情報紙

あじさい Ⅱ

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

平成29年 7 月 ・ 第 20号

どんな命でも 大切な命 ！

やまゆり園事件から 1 年

天声人語

1970年、横浜市で脳性まひのある2歳の女の子が母親に殺された。施設への入所を断られ、将来を悲観しての犯行とされた。母親の境遇を思いやる地域住民らが減刑を求めて運動を起こす。しかし、これに異を唱えた人たちがいた▼「母親を憎む気持ちは毛頭ない。だが罪は罪として裁いてほしい」。脳性まひの当事者らが思いを意見書で訴えた。切実な言葉が本紙に残る。「減刑になることは、僕たちの存在が、社会で殺してもいいということ」「かわいそうだから障害児を殺した方がいいという、そんな愛ならば、いらない」▼半世紀前の訴えを、男は想像すらできなかったろう。相模原市の「津久井やまゆり園」で19人の命が奪われた。事件から、きょうで1年になる▼あまりにもむごく、異常な犯行だった。しかし今も答えが出ないのは、被告の男の思考そのものも異常だと片付けることができるのか、という問いではないか▼「彼は正気だった」。和光大名誉教授の最首悟さんが事件後にそう語っていた。「いまの日本社会の底には、生産能力のない者を社会の敵と見なす冷め切った風潮がある。この事件はその底流がボコッと表面に現れたもの」。障害のある娘と暮らすゆえの重い言葉であろう▼言語障害があるならあるまま、喋れるなら喋れるまま、お互いの存在を認め合う関係を――。あのとき声を上げた一人である故・横田弘さんが著書で述べている。問われているのは、当たり前のことができるかどうかである。

2017・7・26

事件の被告、植松聖（さとし）は事件を起こす動機のひとつに「施設を訪れる親たちの疲れきった表情を見て、障害者は社会を不幸にするだけだと思った」ことをあげている。大きなお世話であり、被告の勝手な感情で尊い大切な命を奪われてはたまったものでない。

知的障害者は何もできないと思われがちだが、そうではない。一人ひとりが個性、特性を活かして頑張って生きている同じ人間だということを知ってもらいたい。
犠牲になられた 19 人にはそれぞれの人生の物語があり、夢や希望があったはずです。

この事件は、あまりにもむごく、異常な犯行だったが、しかし、ツイッターなどには植松被告の「生産能力のない者を社会の敵と見なして抹殺する ＝ 優生思想」に賛同する書き込みが相当数あったそうだ。この現実の方にそら恐ろしさをおぼえる。

６０～７０年代、身体や精神に障害がある人たちの生活を支援する大規模施設「コロニー」が全国各地につくられた。その後、81 年の「国際障害者年」をきっかけに、近年は、施設を小さくし、地域（街の中）に根ざして生活を送る「地域移行 ＝ 共生社会」が進められているのに、この事件を契機に再び街から遠い山里に隔離されるのではないかと危惧される。

ヘイトクライム ＝ 差別思想

誰もが心の底に持っているといわれて、今アメリカで問題になっているそうです。

偏 見 → 差 別 → 暴 力 → 排 除 とエスカレートしていく。

こうした考え方を根本から無くすには、幼少時からの教育と社会環境づくりしかないといわれている。　人間形成には教育がいかに大事かうかがわれる。

よねしろ新報（昭和62年1月28日　第3種郵便物認可）平成29年（2017年）6月18日（日）

通常総会

「共生社会」構築目指し活動

鹿角手をつなぐ親の会 研修会や交流会も開く

第61回総会

スナップ・新聞

ももこハウス様から贈られた
ピンクのエプロンを初披露！
すてきな笑顔に映えています